

ウォルチュルサン
月出山は韓国南西部にある花崗岩の針峰が林立する山群の山である。また「海割れ」で有名になったチンド
珍島は、王朝時代に官僚が島流しにされたところで、さしずめ江戸時代の八丈島のような島だ。面積は八丈島の約6倍もあり、種子島と同じくらいで、韓国では3番目に大きい。

40年ほど前に当時のフランス大使がこの「海割れ」現象を見て「モーゼの奇跡」としてヨーロッパに紹介してから、人々に知られるようになったという。私はラジオで聞いて初めて知り興味をそそられ、海の上を歩いてみたくなった。

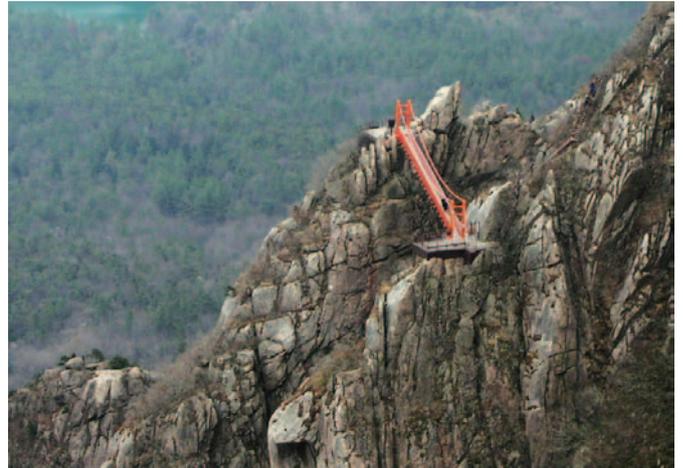
それは大昔から二つの潮流が激しくぶつかる所に、少しずつ砂利が堆積してきて、干潮のときに盛り上がった部分が現れて、道のようになる現象をいう。自然現象なので毎年同じ日というわけではない。おおよそ4月上旬から下旬ころという。島には半日ハイキングに手ごろな山も幾つかあるので、「海割れ」以外にも興味は尽きない。また島からさらに南の済州島に韓国で一番高い山・漢拏山(1,950m)がある。

1日目：成田から空路、仁川へ行き、空港から直通高速バスで木浦^{モッポ}へ行く。そこからタクシーで霊岩^{ヨンアム}へ向かった。月出山の登山口にある簡素な民宿でオンドルが暖かい部屋に泊まった。月が煌々と輝き、岩壁が光っていた。

時差なしの外国へハイキングに～という案に、回を重ねた7名の女性でスムーズに山麓まで着いて、ワクワクしながら就寝した。

外洋に接している木浦は、王朝末期にいち早くキリスト教が伝わったところで、日本統治時代のトンネルや神社跡なども残っている。

2日目：朝食は山菜薬膳料理、そしてお弁当も用意して



有名な「雲の吊り橋」

もらって出発する。有名な雲の吊り橋(クルムタリ)まで約1時間、ゴツゴツとした岩山が眼前に広がってきた。日本では川の兩岸をつなぐのが橋というイメージがある。ここの橋は峰と峰とをつなぐつり橋である。以前は、スリル満点で揺れる足もとの板の隙間から、はるか120mも下の道に行く豆粒のような人影が見えたり、橋の中央で恐怖のため立ち往生している人も見かけた。改装された現在は、豆粒も見えないし安心だ。

このように山と山とを繋ぐ橋というのは韓国では、ほかの山にもある。山頂へは小刻みな登降をくり返していき、抜けるような青空のもと花崗岩の白い岩肌が光る。

やがて山頂・^{チョナンボン}天皇峰809m。素晴らしい景色をおかずにみんなで早めのランチを広げる。平日なので数人に会っただけだが週末にはたくさんのハイ

カーでにぎわう。ここから南西へ岩稜の縦走路を進むが、整備されているのでロープは不要だが注意して進む。

下山したところにある道岬^{ドカブサ}寺は千年以上前に創建された古刹だ。そこで地元のAさんと言葉を交わした。





海割れするとき

多いそうで、はるか南方には済州島がある。アリの石碑のところへ下山して、昼食は名物の鴨料理に舌鼓をうった。そして王朝時代の著名な山水画家の屋敷だった^{ウルリンサンバン}雲林山房のたくさんの絵画を見てまわった。広い庭

「どちらから？(オディソ オショツソヨ?)」
「日本からきました(イルボネソ ワツスムニダ)」
という具合だ。ひと汗流したい…と言ったら、バスに乗らずに自分の車で木浦の銭湯へ案内してくれた。今日は知人を案内してきた帰りなのだそうだ。御厚意に感謝して、ささやかな手土産を受け取ってもらって別れた。

一浴後、夕食はAさんに教えてもらった店で、特上の焼肉を賞味した。そしてタクシーに分乗して、観光課の瀧口さんに紹介してもらった珍島の宿へ行く。昔は船で渡ったというが、今は500mの珍島大橋を車に乗ったまま渡るだけなので、はるばる島へ来た～、という実感がわかなかった。瀧口恵子さんは山梨県出身で帰化して25年以上になり、珍島の文化観光課に勤務している。

3日目：「海割れ」のお祭は明日からで、今日は準備に忙しそうだ。朝、郡庁の観光課へ行って瀧口さんに資料の送付などのお礼を述べ手土産を渡した。今夕に「海割れ」を見に行くことにして、まず最高峰の尖察山^{チヨムチャルサン}へ登ることにする。タクシーで雲林山房へいき、双溪寺の横から沢沿いの小道を登っていく。こじんまりしているが由緒ある寺で、智異山^{チリサン}南面にあるのが総本山という。去年の秋に智異山で沢登りをした時、その双溪寺へ下って、境内が見事な黄金色のじゅうたん(銀杏の落葉)だったことを思い出した。林を抜けて、尾根に上がると涼風が心地よく、ゆっくりでも屋前には485mの山頂へ着いた。双溪寺から約1時間半くらいだ(東京の高尾山は599m)。

小さい山の大展望! ぐるりの海上には200以上の島々が浮かんでいる。多くは無人島で渡り鳥も

の一隅にある蓮池は映画のロケにも使われたところで、意外と小さな池だ。

ところで、旅と酒の歌を8千首余も残した歌人・若山牧水は、死の前年に珍島を訪れている。日本の統治下だった当時、朝鮮へ揮毫^{キゴウ}旅行に出掛けて珍島を訪ねた。最晩年の『朝鮮紀行』にはその珍しい風物が詠われている。

青春時代の佳作

〈幾山河越え去りゆかば寂しさの果てなむ国ぞ今日も旅ゆく〉や

〈白玉の歯にしみとおる秋の夜の酒は静かに飲むべかりけり〉

などは良く知られている～。こよなく酒を愛し、病床での絶筆も酒が欲しい…という歌だった。私は出発前に『朝鮮紀行』に目を通して、いっそう珍島への思いをかきたてられたのだった。牧水に無形文化財の珍島挽歌を捧げたい。

「山河の草木は若返り わが人生は暮れてゆく…あの世への険しい道を…だれがお供をしてくれようか…」

また大町桂月は牧水より前に明治～大正時代に多くの紀行文を残しているが、朝鮮半島へも足を延ばし、紀行文を残している。文語調で読むのがひと苦労だったが、秀吉軍勢の侵略にも触れている興味深い内容だ。書店では見つからず、図書館で探してもらって、やっと読むことができた。

その後、待望の海岸へ行く。本当に海が割れるように音もなく潮が引いていく…。まさに歌の通りだ。「海が割れるのよ、道ができるのよ、島と島とがつながるの…、こちら珍島からあちらモドリまで…」。歌のヒットで、日本からの観光客が増えてきたそうで、ツアーの一行も見かけた。



王朝時代の著名な山水画家の屋敷だった雲林山房

祭りのいわれは、「島には昔、トラがよく出没したので村人たちは対岸の島へ避難することにした。しかしポンおばあさんだけが逃げ遅れてしまい、みんなに会いたいと毎日神に祈っていた。すると夢に『明日海に虹を掛けるから渡りなさい…』という神のお告げがあり、村人たちがその道を渡ってきて無事再会できたが、おばあさんは力尽きて亡くなってしまった。その後二つの島の人々は『祈れば願いが叶う…』という「海割れ」のできる場所で互いに会って、毎年『豊漁』や『願いごとの成就』を祈りながら、ワカメなどを採って過ごす習慣ができた」という。

史実によれば、100年くらい前までトラが生息していて、2頭は捕まえて殺し、2頭は本土へ逃げた…というから、秀吉軍のころトラがいたのだろう。

私たちはレンタルの長靴を利用して海の上を歩くことにした。完全に水が引いていない所やヌルヌルのワカメが生えている所もあるので、転倒しないようにストックを使った。2.8kmにも渡ってできた海の道では、アサリやワカメ採りに余念のない人もたくさんいた。夕やみせまるころ再び海水が満ちてきて、もとの海に戻っていくのを見てから海岸に別れを告げた。ポンおばあさんの大きな石像がジーンと海を見ている…。

また400年以上前の秀吉のころに海上で戦死した豊臣水軍の遺体が珍島に流れ着き、島民が埋葬していたということで、21世紀になって新たな交流が始まっている。「敵の兵士を手厚く葬った住民に感謝」という記事が、日本のTVや新聞で紹介されて、

知られるようになったのだ。海で死体を発見したら収拾して丁寧に埋葬してやるのが海の掟、放置しておく船の後をついて来る…とも言われている。私は海上での戦いといえば、〈壇ノ浦〉の戦いを思いですが、一世を風靡したのちに滅ぶというのは、平家も秀吉も酷似しているように思う。

その後、木浦へ戻って海辺に近いホテルに移動、海鮮料理で最後の夜を満喫した。潮風に吹かれながら見た幻想的な海上の噴水ショーは、高く噴き上げられた水が音楽に合わせて優美にくねる姿が踊るようで、照明の美しさとあいまって、ため息の出るほど素晴らしかった。

4日目：朝食前に標高236mの儒達山^{ユダルさん}へ登る。小高い丘のような山頂の西に真新しい木浦大橋がよく見える。朝食後、海洋文化展示館へ行った。12～13世紀ころに難破した高麗の船から発掘された青磁の皿や日本の瀬戸陶磁器なども展示されていた。今日は先日の月出山のときに知り合ったあのAさんの案内である。数々の親切に感謝しつつバスターミナルで別れた。

〈ト マンナヨ! アンニョン ヒ ケセヨ (さようなら)〉。私たちは高速バスに乗り、満ち足りた気持ちでウトウトしていたら仁川空港に到着した。みんなのニコニコ顔が嬉しい。

〈山旅で命の洗たくいそいそと ゆるやかな古い老婆の休日〉

朝鮮半島の人々とは1500年以上も文物交流の歴史がある。だが、朝鮮通信使のことよりも、不幸な出来事というのは、なかなか忘れられないで、現在につながっている。だからいっそう、雨森芳州^{あめのもりほうしゅう}の尽力が光るのだと思う。

(2013年4月の「海割れ」に合わせて行く)

〈費用〉約五万円 (チケット+山行費)

▲掲載写真はいずれもGoogle Panoramioより

注)

雨森芳州 (1668～1755)：江戸時代中期の儒者。中国語、朝鮮語に通じ、対馬藩に仕えて李氏朝鮮との通好実務にも携わった。